

日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ 熊本大学 2009年11月8日(日)

モンペリエ学派の脈学と生氣論

名古屋市立大学人間文化研究科 寺田元一

序論

モンペリエ学派における脈学の重要性

ディドロ『ダランベールの夢』

「ボルドゥ(ダランベールの床に近づき、脈を見……)/脈は正調です」(*Après s'être approché du lit de d'Alembert et avoir tâté le pouls.../Le pouls est bon*)(Diderot, *Œuvres philosophiques*, éd. par Paul Vernière, Garnier Frères, 1964, p. 285)

モンペリエ学派の脈学関係著作:

Bordeu, *Recherches sur le pouls par rapport aux crises*, Paris, 1756

Michel, *Nouvelles observations sur le pouls, par rapport aux crises*, Paris, 1757

Ménuret, *Nouveau traité du pouls*, Amsterdam, 1768¹

Fouquet, *Essai sur le pouls*, Montpellier, 1767

従来の研究では生氣論成立に当たっての脈学の重要性は無視されてきた。

Rey, R., *Naissance et développement du vitalisme en France de la deuxième moitié du 18e siècle à la fin du Premier Empire*, Oxford : Voltaire Foundation, 2000 (生理学関係ではグリソンの被刺激性、哲学関係ではライブニッツ重視、脈学は無視)

Marié, E., *La Sphygmologie en Chine et en Europe, des origines jusqu'au XVIIIe siècle*, thèse de doctorat de l'EHESS, Paris, 2003 (生氣論との関係で脈学の展開を捉える視角の欠如)

しかし、モンペリエ学派の生氣論樹立の立役者であるラ・カーズとボルドゥが 1750 年代に草創期の生氣論的著作を発表していたとき、同時に脈学著作も書かれ、脈学の発展に連れて生氣論もより深まっていた。両者には深い内的連関がある。

結論を先取りしていえば、生氣論と脈学は以下のような連関を通じて互いに深め合った。

*単なる診断法であった脈学を生理学と結合した(脈学の生理学的「革命」)。

*その過程で、脈という身体表面の機能が、有機構成(organisation)やその働きである生動的機序(économie animale)という身体内奥の全体構造や機能と連関することを示した。言い換えれば、分泌腺の問題と同様に脈学の生理学的位置づけが、生氣論という身体観が文脈化され学問的に肉付けされる(研究を通じてパラダイムとしてその理論的可能性を現実化する)場となった。

*その結果として、機械論的身体観に代わる生氣論的身体観が定立された。それは、「諸生命の生命」、「分封する蜜蜂」といった比喩を用いながら、諸器官や身体表面-内部の関係を脈などを媒介とする共感ネットワークとして捉え直す構造機能論的見方であり、そうした動的関係の身体構造

¹ L'ouvrage de Ménuret fut publié pour la première fois comme l'article POULS de l'*Encyclopédie* en 1765.

観によって有機構成と生動的機序をつなげるものであった。

ボルドゥ脈学と生氣論

Recherches anatomiques sur la position des glandes (1751)以前

Chilificationis Historia (1743)と *Dissertatio Physiologica de Sensu Generice Considerato* (1742)

神経と感覚重視。反機械論。生氣論的というよりはアニミズム的身体観。

Recherches anatomiques sur la position des glandes (1751)

排泄や分泌の生理学と脈学との連関(脈一分利一排泄・分泌)。

ただ、この時点ではボルドゥがどこまで脈学に通じていたかは不明。とりわけ、彼は Nihell によって紹介された Solano de Luques の説 (*Observations nouvelles et extraordinaires sur la prédiction des crises etc. par D. Francisco Solano De Luques, enrichies de plusieurs cas nouveaux par M. Nihell* (1748)として仏訳紹介)の影響を受けたが、ソラノの説をいつどのように知ったかは明らかでない。

この著作の基調は、各分泌腺には感覚性があり、それが分泌や排泄を司り、同様にして各器官にも感覚性(生命)があり、身体の生動的機序は諸生命の生命と捉えられるという点にある²。その意味で、この著作は生氣論の旗挙げの書であるが、感覚性が二つのレベルで捉えられる点で、まだアニミズムを引きずっている。というのも、分泌にはこの感覚性(生命)だけでは不十分で、さらに神経系に支えられた ton(緊張、力)というもう一段上のレベルの力が必要とされるからである。それは、各分泌腺が正常に機能するように監督する神経に宿る力とされる³。これが、ファン・ヘルモントらの説くアルケウスを髣髴させるのは言うまでもない。この時点のボルドゥはまだ、こうしたアニミズム的原理から完全には自由ではない。なお、この ton はストア派のトノスに由来する。トノスとは、プネウマが身体諸部分を統一的に保つ作用であり、ここからも、この時点のボルドゥの立場がアニミズムに近いことがわかる。

したがって、この段階は次のように特徴付けられる。既に生氣論の概念装置はほぼ揃っているが、それらをアニミズムを超えて独自に生氣論的に体系化するには至っていない。

Recherches sur le pouls par rapport aux crises (1756)

この著作でボルドゥは ton の形而上学を離れ、生氣論へと大きく前進する。というのも、ここでは脈

² « toutes [les abeilles] concourent à former un corps assez solide, chacune cependant a son action particulière à part ; une seule qui viendra à céder ou à agir trop vigoureusement, dérangera toute la masse d'un côté : lorsqu'elles conspireront toutes à se serrer, à s'embrasser mutuellement, et dans l'ordre et les proportions requises, elles composeront un tout qui subsistera jusqu'à ce qu'elles se dérangeant » (Bordeu, *Recherches anatomiques sur la position des glandes*, § CXXV, *Œuvres complètes de Bordeu*, Paris, 1818, I, p. 187).

³ Ainsi le ton du nerf surveille et dirige la sécrétion, car « le sphincter dirigé par des nerfs, pour ainsi parler, attentifs et insensibles à tout ce qui ne les regarde point, ne laissera passer que ce qui aura donné de bonnes preuves ; tout sera arrêté ; le bon sera pris, et le mauvais sera renvoyé ailleurs » (*Ibid.*, p. 163-164. C'est Bordeu qui souligne).

一分利という病理学的地平だけでなく、脈—生動的機序という生理学的地平でも脈は考察されるからである。つまり、新たな生理学パラダイムである生氣論が、脈学レベルで文脈化され肉付けされていくことになるのだ。だから、脈学研究は、生氣論が重視する表面と深部、器官と器官の共感的ネットワークを具体的に解明し、生氣論的見方そのものを深め、そのパラダイム化にも貢献したわけである。

彼はソラノの脈学から出発するが、生動的機序という新たな生氣論的土台の上によって、それを乗り越えた新たな理論と実践を発見しようとする。とりわけボルドゥは、ソラノが脈を症候として重視しながら、分利の脈などを扱わず、また脈の理論的考察にも無頓着なことに不満だった。他方で、病理学とまったく無縁に、脈をただ数学的量的に扱うだけの機械論的な脈学も、器官の連関や生動的機序を見ない点でソラノ以上に問題だった。

かくして、ボルドゥは脈を狭い診断法の枠から解放して、広い生理学的地平で考察しようとする。楽器の合奏の調べにも似た自然で健康な脈⁴。そして、脈はもはや脳神経系の ton によって監督されなくなる。脈はある部分の病変や健康の指標であり、また諸器官の相互関係の結果の指標に過ぎないのだ。それは確かに神経系に媒介されてはいるが、それに監督されてはいない。

このように、脈学は単なる診断術の枠を超えて、生氣論の生動的機序観に即して生理学的に捉え返され、その結果アニミズムからも解放されることになった。感覚性は ton と無関係とされ、運動力を持つ多くの神経が各器官に集合した結果、そこに独自の仕方でも形成される新たな生命に過ぎなくなる⁵。脈は心臓と動脈の感覚性に依存するもので、その結果、神経系や循環系を媒介にして器官と身体全体の努力や状態を反映するとされる。

こうしてこの著作で、生氣論は脈に即して文脈化され、その具体的内実を肉付けしていった。しかしボルドゥは、伝統的脈学の「生理学化」を完成させなかった。脈を全体的生動的機序と結びつける方向性は明確で、そのための生氣論的要素も揃っているのに、脈を生氣論的に明確に定位できなかった。つまり、「諸生命の生命」、「分封する蜜蜂」といった比喻を用いて、諸器官や身体表面—内部の関係を媒介する共感ネットワークとして、脈を生氣論的に位置づけ直せなかったのだ。この仕事は中国脈学の豊かな身体観を吸収したメニューレによって始めて果たされた。ボルドゥは中国脈学を診断法の視角からのみ見てその経験的性格を否定的に評価し、また、彼の神経中心の生動的機序観は中国医学の経絡中心の生動的機序観と相容れなかった。これらがどうやら禍したと思われる。

メニューレ脈学と生氣論

L'article POULS de Ménuret dans l'Encyclopédie

脈学の生理学的「革命」の完成者。生氣論を脈学において文脈化し、脈を生氣論的に定位させただけでなく、それを通じて、諸器官や身体表面—内部の関係を媒介する共感ネットワークとして有機構成、生動的機序を生氣論的に全面展開した。しかもそれを、身体全体の内に共感的関係を想定する中国医学の基本的身体観を取り込むという、異文化コミュニケーションを通じて果たした。メニューレはこの長大な項目で、五つの脈学を批判的に紹介する。そのうちで彼が共感を寄せるの

⁴ « La marche naturelle du pouls, dit le vitaliste, peut être comparée, en général et en passant, aux accords qui résultent du mélange bien proportionné de plusieurs instruments de musique » (*Ibid.*, p. 412).

⁵ « Chaque partie organique du corps vivant a des nerfs qui ont une *sensibilité*, une espèce ou un degré de *sentiment*: cette *sensibilité* fait la vie des nerfs; elle est la suite nécessaire de leur constitution, de leur position et de leur modification dans le corps ou dans ses parties » (*Ibid.*, p. 420).

は、ボルドゥの脈学と中国脈学である。メニューレはボルドゥを継承しているのだが、ボルドゥに対してかなり批判的である。批判はとりわけ脈の理論的的定位や原因論に関わる⁶。この批判は、先に見たように、私が指摘したボルドゥ脈学の不十分さを的確に、だが誇張して捉えており、メニューレがこの項目で、生気論的脈学をこの面においてかなり自覚的に補完し、かつその面での自分の貢献を強調しようとしたことを窺わせる。

そこで登場するのが、脈の原因論にも関わる「諸生命の生命」の共感ネットワークとして有機構成と生動的機序を捉える見方である⁷。さらに、メニューレはボルドゥの神経中心主義を超えて、生動的機序を神経系と脈管系総体の連関において広く捉え直していく。しかも、諸器官は弦によってつながれるとされ、そこから脈の原因もまた多数の弦の協和や不協和にあるとされて、中国脈学を摂取して身体を楽器と喩えていく⁸。こうしてメニューレにおいて、中国医学の身体観と通底する生気論的身体観が脈学の文脈で、諸器官や表面-内奥の音楽的共感的ネットワークとして、ボルドゥよりもはるかに色彩豊かに表象化されることになる。

かくして、二つのことが同時に果たされる。1) 新たな生理学的脈学の誕生、2) 中国医学の共感的協和的隠喩に満ちた新しい関係的身体観の形成である。

結論

*初期ボルドゥの生気論とそのアニミズム的残滓としての ton 概念

*脈学の文脈での生気論の発展(脈学の生理学的「革命」)と生気論の脱アニミズム化

*表面-内奥、諸器官の関係を共感ネットワークと捉える新たな生気論的生動的機序観成立

*脈学「革命」を通じた身体観の転回はボルドゥによって基本的部分は準備され整えられたが、それに要石を置いて完成させたのは、中国脈学の身体観を豊かに採り入れ、関係的構造機能論的身体観を隠喩的に豊かに表象化したメニューレだった。

⁶ « Bordeu a presque entièrement négligé, dit Ménéuret, la partie théorique, l'étiologie du pouls » (*Encyclopédie*, XIII, p. 237b).

⁷ « le corps ne doit paroître que comme un assemblage infini de petits corps semblables, également vivans, également animés, qui ont chacun une vie, une action, une sensibilité, un jeu & des mouvemens propres & particuliers, & en même-tems, une vie, une sensibilité, &c. communes & générales. Toutes les parties concourant chacune à leur façon, à la vie de tout le corps, influent réciproquement les unes sur les autres, & se correspondent toutes ; chaque partie fait ressentir aux autres sa santé ou ses dérangemens ; tel est l'homme sur lequel on doit examiner l'influence, la sympathie mutuelle, les rapports réciproques des différentes parties, les départemens, &c... » (*Encyclopédie*, XIII, p. 240a-240b)

⁸ « la comparaison du corps humain avec un luth, ou un autre instrument harmonique, nous paroît très-juste » (*Encyclopédie*, XIII, p. 227b).